

科学技術・学術審議会学術分科会長声明  
「学術研究の持続的発展と卓越した成果の創出のために」

—ノーベル賞三年連続受賞を祝して—

＜概要＞

- 「人がやらないことを手がけること」を信条にした研究によって、生物学の発展に大きく貢献。現在では、医療への応用も期待されているが、その初期においては社会への応用が意識されたものではなかった。
- 学術研究は、研究者の知的探究心や自由な発想に基づき展開される知的創造活動。価値を創造するまでには一定程度の時間を要する。大隅博士の御業績も、長期にわたる粘り強い知への熱望と知的試行の継続的な蓄積が生み出したもの。
- 他方、大隅博士の研究成果は二十年前から三十年前のもの。近年、短期的な成果やすぐに役立つことに過度にとらわれ、長期的な展望で未踏の領域への大胆な挑戦が少なくなってきたことを危惧。さらに、学生が知の創出の中核を担う博士人材になることを躊躇するようになっている状況は、極めて深刻な問題。
- 日本の学術研究が、これからもノーベル賞級の卓越した成果を生み出し続け、「国力の源」としての真価を発揮していくためには、研究者の独創的な発想に基づく多様な挑戦への一層強力な支援と、研究環境の整備が必要。
- そのためには、第5期科学技術基本計画に掲げる政府の研究開発投資の目標である対GDP比1%（5年間で26兆円）の達成が極めて重要。その際、基礎科学力を強化するために、多様で独創的な研究を支えている科研費、未来を担っていく若手研究者への支援、大学等を支える基盤的経費など、学術研究・基礎研究の振興策への重点投資が必須。
- 併せて、制度やルールの間でも、研究時間の減少に歯止めをかけ、研究に専念できる環境を整備する観点から、様々な改善が必要。
- 科学技術・学術審議会学術分科会や関係部会では、研究者の活動がより創造的、挑戦的となること等を促すための改革が具体化されており、これらの改革を着実に推進するため、所要の予算の確保・充実と研究環境の改善に繋がる諸施策の実行を強く求める。